文芸資料研究所蔵
仮名垣魯文『興画合真影人物誌跋文戯章』解題・影印
―『くまなき影』と影の文化について―

佐藤　悟

実践女子大学文芸資料研究所所蔵『興画合真影人物誌跋文戯章』は表紙共四丁、本文は僅か二丁という仮名垣魯文自筆の小冊子である。

『興画合真影人物誌』は興画合のパトロンであった波月亭花雪の三周忌の追善として慶応三年（一八六七）に刊行された『くまなき影』の最初の名前であったと思われる。『くまなき影』は興画合の作者の影の肖像と伝記が掲載されていることでよく知られている絵本で、幕末の影の肖像の流行を今日に伝えるものである。『くまなき影』に記された魯文跋文は本書とは全く異なるものであるが、本書には

波月亭花雪の居士が三周の忌
現在写真なる影容を摸させ。平常の所為性質奇癖を、一人一話の伝記にものさせ。高巧粗拙に拘搆はず。一首一句の自筆を添。梓に上して小冊子とし

と記してあり、さらに細木香以や山々亭有人の序文についても言及していることも、『くまなき影』の跋文として書かれたものであったという推測を裏付ける。おそらく跋文の第一草稿であったのであろう。興画合については拙稿「『興画合作者評判記』翻刻」（実践女子大学文芸資料研究所別冊年報第二号、一九九二年）において触れたので、ここでは触れない。

波月亭花雪はその没後直ちに製作された池田孤村画の追善摺物（大英図書館蔵『摺物貼込帖』所収）や『花吹雪』の記載により、慶応元年六月五日に没したことが知られる。享年二十一歳という若いパトロンであった。その追善として慶応元年に『端月集』が、慶応二年には『花吹雪』が刊行されている。［図版1］は『花吹雪』に掲載された花雪の肖像画である。三周忌に当たって「興画総連」によって計画されたのが「追福興画合」で、柴田是真による作品募集と上梓を予告した摺物が作成されている（『摺物貼込帖』所収）。それによれば題は故人にちなみ「波月花雪に結ふ五行」というもので、『くまなき影』に掲載された興画合の作品と一致する。締切は四月二十五日、五月五日に開巻が行われた。この日は祥月命日の一月前に当たるので、当初は『くまなき影』の刊行を六月五日に予定していたのかも知れない。香以の序文の年記が「于維慶応第三龍集丁卯季夏」とあるのもそれを裏付けよう。ただ刊行は遅れたらしく、有人の序文が「時に慶応みつのとし自詠の秋の一句を手向

図版1

て」と結ばれていることから、慶応三年秋にずれ込んだのであろう。当初の計画では『くまなき影』も『端月集』『花吹雪』同様、興画合の作品集として刊行される予定であったと思われるが、当時流行の影の肖像、それに各人の伝記と発句を加えようとしたために手間取ったのであろう。

『興画合真影人物誌跋文戯章』も慶応三年秋の年記を有するので、刊行間際に執筆されたものと考えられる。これが『くまなき影』の跋文として用いられなかった理由は不明である。

本書の価値は単なる魯文の逸文というに止まらず、幕末に流行した影の文化をどのように認識していたかを示すもので、美術史的にもその資料的価値は極めて高いものである。そのため翻刻とともに注釈・絵注を加え、さらに比較のために『くまなき影』跋文の翻刻を付した。

【書誌】

体裁　中本一冊。表紙共四丁。縦十六・五糎、横十二・八糎。

表紙　「興画合真影人物誌」「跋文戯章」と二行に題名を墨書する。そのほか朱筆で△を記した下に「福助」「最々」「同時」「写真鏡」「奇異変相」「不知火影」「現在写真」「伯仲比競」「相違」「影容」「風調」「合奏」「不論」「現世」「平常」「口調」「走虎」に振り仮名を振った本文中の語彙を記し、朱筆で「ナドのふりがな御気ヲ付可被下候」と続ける。この他朱筆で「これらは殊に御用心」「右筆のふりがなよろしく御心添奉願候」「此余」「此余も尚ある可候御校訂奉願候」とやはり振り仮名についての注意を記す。

蔵書印　「晴風文庫」（清水晴風）

【凡例】

推敲を重ねたらしく、張り紙による訂正個所があるので、＊で訂正個所を示し、〔　〕内に訂正以前の文章を示した。さらにそれに訂正を加えたものを〔　〕で示した。

句読点は朱筆である。

興画合真影人物誌

跋文戯章

仮名かき

魯文稿

（表紙）

跋

両婦の黒髪蛇と変じて。高野の法道の案内となり。青葉の笛の音に導引。夜陰の障子に朦朧たるは。讃仏巧手の狂言綺語。彼方は筑紫の不知火影に顕れ。此方は須磨の月影に。姿を写す戯＊房の鑑。時代な所作の壁の影世話に砕きし拳の鳥刺五指を掴みて〔房の鏡。時代と世話の真中興迄。古風な所為を見さいなと。拳の鳥刺夫大松茸。五指を掴みて（付表A下）〕兎と仕成。その遊戯も何頃消え。千里を走虎の新案は。当時惠齋芳幾長兄が。障子一重を（1オ）自在にして。描の俳優数輩歟の。半身の影をとりが啼。東錦に摺立の。青天紅粉彩色を用ひず。的人をして視る如く。彼西洋の写真鏡。奇異変相に相違て。和ぐ皇国の風韻あり。見た＊目も最々面黒しと通家が夜宴の坐興とせるより此戯業一時に流行れぬ茲に〔催す〕

興画〔会主〕の連中〔衆〕達〔催主の〕此道の始祖波月亭花雪の居士が三周の忌〔目も最々面黒しと。戯子を真似ぬ素人も。菊石雀子斑痣皰の。隠れたるより顕るゝ。自己の影を傭工に写せて、是を夜宴の坐興とせり。模写せ（付表B下）〕ば絵となる意旨もて。是行春整居梅崕大人。興画に功名諸子の。好歹醜美不論。貧福尊（1ウ）卑の差別なく。現在写真なる影容を摸させ。平常の所為性質奇癖を、一人一話の伝記にものさせ。高巧粗拙に拘搆はず。一首一句の自筆を添。梓に上して小冊子とし、此道の始祖花雪霊兄が。三周の忌の同時に臨み。現世に残されし面影を。巻尾に附して追慕の愛情。深長なるを序に合〔諷〕奏。山城涯と山々亭が、雅々と聳えし高文の。風調は仮侶もなら坂や。児手柏の二個に恥ず。伯仲比競の盲蛇。足下が毫を揮はずば。跋が悪いと連中の。尾立に法の道案内。＊口調〔口調〕（2オ）も青葉の笛ならで。判然聞えぬ朦朧文章。仮字も手尓波もしらぬ火の。つくしにつくす戯呆の贅言。是でも済歟須磨の浦。両馬が驥尾につき影や。障子の＊陰〔影〕から写し絵の。福助めかしてとつぱくと〔に〕三馬叟の句調に倣ひ。硯を鳴す僕は。舌出孩児と諢名をとりし。金竜山下の風雷子

仮名垣魯文戯題（2ウ）

于時慶応三丁卯秋

【注釈】

○両婦の黒髪蛇と変じて。高野の法道の案内となり。

享保二十年（一七三五）三月四日に大坂豊竹座で初演された並木宗助・並木丈助合作の浄瑠璃「刈萱桑門筑紫轢」の中に、加藤繁氏は仲睦まじそうな本妻牧の方と側室千鳥の前の髪の毛が、二人の仮睡中に蛇のように喰い合うのを見て、発

心して高野山で遁世を遂げる場面がある。文化十二年（一八一五）に刊行された葛飾北斎画『浄瑠璃絶句』［図版2］にもこの場面が描かれ、良く知られていた。この作品を歌舞伎化して天保元年（一八三〇）三月江戸河原崎座で上演された「添削筑紫轢」では障子に蛇の形が写るという演出が行われ、天保三年八月市村座「増補筑紫轢」（二世）においても同じ演出が行われたらしい。［図版3］［図版4］は天保二年に刊行されたその正本写『筑紫の写絵』（立川焉馬校、歌川国貞画、蔦屋吉蔵扱）の該当部分である。「彼方は筑紫の不知火影に顕れ。」「仮字も手尓波もしらぬ火の。つくしにつくす戯呆の贅言。」という表現も筑紫を舞台としたこの作品を踏まえた表現である。

図版2

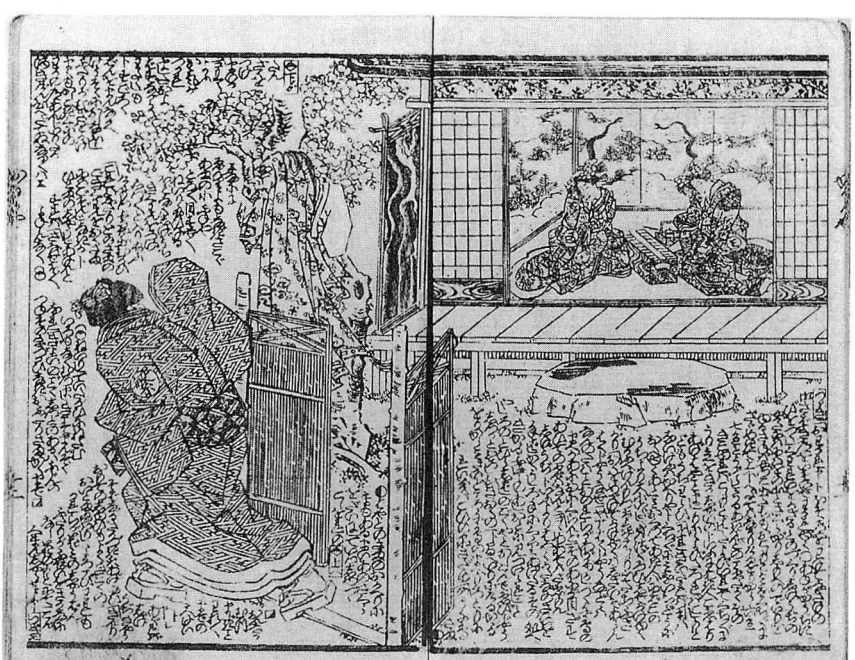
図版3

○青葉の笛の音に導引。夜陰の障子に朦朧たるは。

宝暦元年（一七五一）十二月十一日に大坂豊竹座で初演された並木宗輔・浅田一鳥ら合作の浄瑠璃「一谷嫩軍記」三段目の「熊谷陣屋」には「障子にうつるかげらふの姿は慥敦盛卿」という文句があり、平敦盛を討った熊谷直実の陣屋で、青葉の笛を吹くと須磨の浦で討たれた敦盛の亡霊の影が障子に写る場面があり、歌舞伎化もされて良く知られていた。「此方は須磨の月影に。姿を写す戯房の鑑。時代な所作の壁の影」「口調も青葉の笛ならで。判然聞えぬ朦朧文章。」「是でも済歟須磨の浦。」もこれを踏まえたものである。

○世話に砕きし拳の鳥刺五指を掴みて兎と仕成。その遊戯も何頃消え。

宴席で行われた影絵遊びである。この遊戯について笠亭仙果『於路加於比』の「影絵」の項に詳しい。そこには三角の紙を手の甲に貼って鳥刺の影絵を使う芸



図版 4

図版5（礫川美術館蔵）

能が東海道の宮に残っていたことが記される。幕末には行われていなかったのである。［図版5］は享保（一七一五～三六）後期に刊行された西川祐信『西川筆の海』の中の一図で、その有様を伝える。

○惠齋芳幾長兄が。障子一重を（1オ）自在にして、描の俳優数輩歟の。半身の影をとりが啼。東錦絵に摺立の。晴天紅粉彩色を用ひず。的人をして視る如く。彼西洋の写真鏡。奇異変相に相違て。和ぐ皇国の風韻あり。

落合芳幾は「真写月花之姿絵」という役者とその影絵の半身像を描いた全三十八枚の錦絵のシリーズを慶応三年（一八六七）二月から四月にかけて出板している。［図版6］はその中の一枚で、二代目尾上菊次郎（俳名梅花）を描いたものであるが、この様式のものが三十六枚あり、他に目録［図版7］と［図版8］の市村家橘（五代目尾上菊五郎）を描いた一枚からなる。［図版8］には芳幾が障子に写る役者の影絵を写し取る場面が描かれ、「乍憚以口上御披露」という次のような一文が記される。

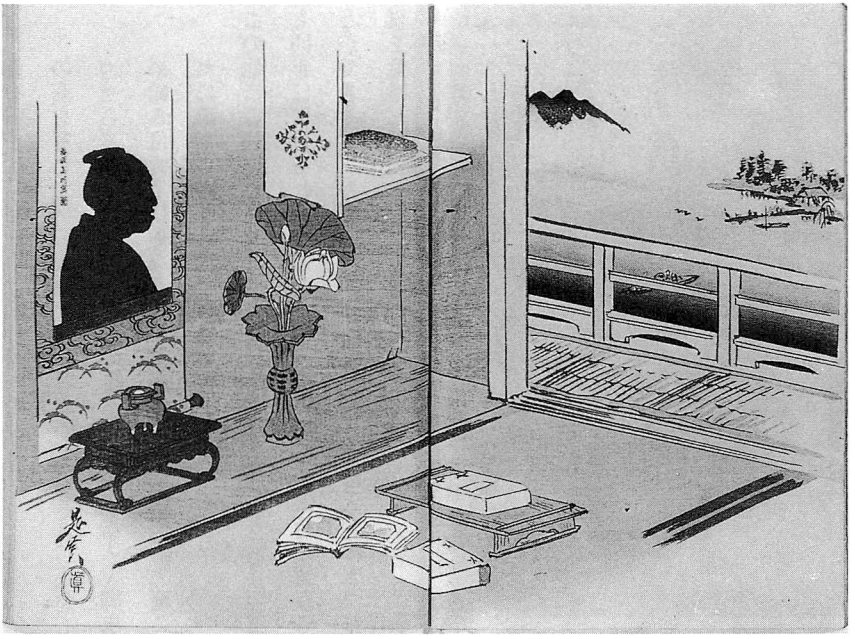
蔭を障子に写せる事は頃日通家の遊なりしを這度我輩の蔭を写して例の大錦とせられしが実に其人に逢る心地せらる願ふは四方の雲頗の御蔭に依て永当〳〵御求め給らば画工は更なり我々迄憑れがひに奈何計大慶これに過ざらんや其ため告条左様としかいふ

この他にこれを再構成した芳幾画の双六「朧月姿絵寿語禄」も同年に刊行されるなど、この当時の影絵の流行を窺うことができる。この影の肖像の流行は西洋から入ってきた写真を意識していたことも同時に窺える。

図版 6

図版 8

図版 7



図版9

○通家が夜宴の坐興とせる

この様子を描いたものが明治二年に刊行された山々亭有人作の人情本『春色玉襷』の口絵に見られる。『くまなき影』の是真の口絵には梅崖高明による花雪の影の肖像［図版9］が掲載されるが、これも生前の遊興の折に写し取られたものかも知れない。

○春整居梅崖大人

波月亭花雪の弟。辻氏。名は高明。皎々舎とも号し、興画合の後継者となった。その伝と肖像は『くまなき影』の外、明治四年冬に刊行された文屋正麻呂編『採誉百人集』にも記される。

魯文は都立中央図書館加賀文庫所蔵『興画合』の序文にあたる梅崖の「興画合当坐即評自序」（慶応二年三月成）の代筆をするなど、梅崖とは密接な関係にあった。

○山城涯

細木香以のこと。山城河岸に住居していたのでこの名

がある。通称、摂津国屋藤次郎。明治三年九月十日没、享年四十九歳。『くまなき影』の序文を記す。パトロンとして名高く、この時期は零落していたにも拘わらず、幕末の文芸・演劇の世界では尊敬を集めていた。魯文は『歌舞伎新報』にその伝記「再来紀文廓花街」（後に『近世実録全書』第十八巻〈早稲田大学出版部、一九二九年〉に「津国屋藤兵衛」として再録）を連載し、その外に竺仙（橋本素行）が明治三十三年刊『恩』に伝記を、森鴎外も評伝「細木香以」（初出、一九一七年）を執筆している。

○山々亭

山々亭有人のこと。戯作者。三題噺・興画合の世界でも活躍し、明治には採菊山人・條野採菊の名で活躍した。

図版10

○三馬叟の句調に倣ひ。

式亭三馬を意識し、さらに舌出し三番叟の連想から次の「舌出孩児」を導く。

○舌出孩児と諢名をとりし。金竜山下の風雷子

舌出し小僧が魯文の綽名であった。『嗚久者評判記』の魯文作「脚色の種本」の項に「しかし作者はれいの舌だし小僧」とあり、この頃刊行された『十六画漢悪縁起』「第十五迦利古須選者」に

は舌を出した画像が描かれている。そしてこの頃、魯文は浅草寺の寝釈迦堂の近所に住んでいた。それを利かせた署名である。［図版10］

【参考】

『くまなき影』の跋文の全文は以下の通りである。

三界十方の人性を。花街一廓の全盛に比せば。土手八丁の長きも短く。田町二丁の短きも長しとせん。定寿五十間の浮台に生れて。二十五明の暁を待たず。迷故の大門に入るを競ふて。駒繋松に意馬を繋ず。愛染桜に心猿を括らず。見帰柳の月影も。馴妓の立姿と告ち。衣紋坂に自己影の。我より背に通人と見違ふ。佐盈中庸の仲之町を。定理の水道尻まで。行個は稀にして。五町を廻り燈篭の。影と象に随従末社。茶屋が案内の燈印に。本来てれん詐りなきも。亦其中に一物あり。迷へば錦繡の裲襠像。悟れば（跋一オ）骸骨臭皮袋。正面を張る格子の魁妓も障子のうちの陰見世に。化粧の物が透て見え。次の間の乱食に。骨湯のあらの露顕たるぞ。彼老和尚が凡眼にあらず。光明仏眼のお見立にて。色即是空。空即是色。容は虚の皮衣。影は実の骨なりけり。此頃粋菩提の粋とか称へ。通と歟呼べる遊客達。青楼遊びの樹下席上に。柳は緑の禿より。松の位の娼妓まで。花は紅の彩色を用ひず。障子に写す面影を。払子の筆もて白紙に摸し。是を坐禅の座興とせるより。其影を追ひ象を伝へて。世の流行の一種となれり。（跋一ウ）茲に興画の連衆等。此道の祖師と聞えし。馴染客の花雪居士が。去旨の早世帰元。三会目の忌を営折に。連中の影を摸縮。是に細見の伝記を添へ。刻して絵巻の相対とす。弥生に開く桜木の。寿長きは。泰山府君を祭るにあらず。文月に懸ぐ。燈籠の絵合は。亡玉菊が追善ならず。居

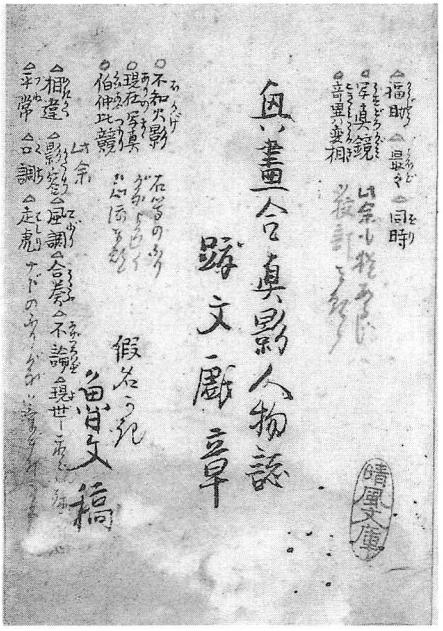
士が興画道徳の。高きを仰ぐに。山城涯と山々亭が。招魂の序文あり。尊哉。見性定仏の波月の君。全盛ざんす惣籬。呼出しの絵合さん。譬十年の苦界を経るとも。九年面壁の壁に居りて。お茶を挽く等類に（跋二オ）あらずと。仲見勢を張子の木菟。ふんたん達磨の影を踏んで。撰取不立八文字。駒下駄の呵羅々々喝と。秋葉の猿の毛頷を揮つて。水道のしりへに記す

金竜山内寝釈迦堂の
いろは長家に
仮名垣魯文戯題

（跋二ウ）

【付記】

末尾になりましたが、図版資料の掲載を御許可くださいました碌川美術館、鈴木重三氏に御礼申し上げます。



真畫合真影人物誌

跋文 附 章

假名文稿

晴雨文庫

跋

両婦の黒髪蛇と變じ高野の法道の妄内とあり。青葉の笛の音小道引夜陰の障子小朦朧たる。讃佛功千の狂言綺語。彼方ハ紫紫の不知火影小顯も此方ハ須磨の月影小姿を寫せ戯

房の鑑時代ある所作の壁の影世話小碎きし筆の鳥刺土産を摺そ

兎と仕成その遊戯も何項消え千里を走る虎乃

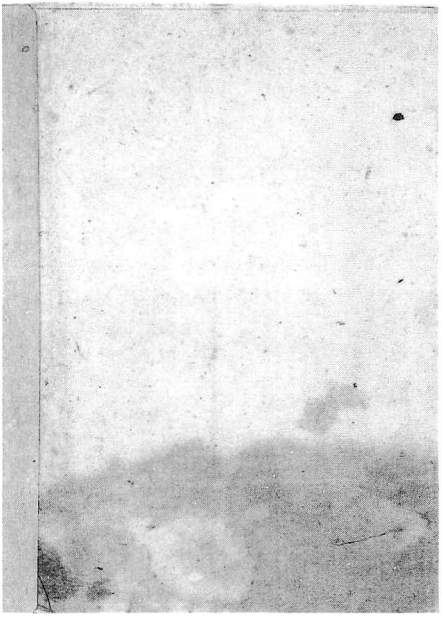
新案ハ當時恵窮芳幾長見ゞ障子三里を

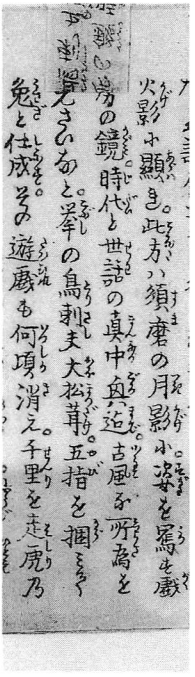
自在巳る描の俳優數輩殆の半身の影を
ろりゞ啼東錦ゝ摺立の青天紅粉彩色を用
ひ生的人巳る視る如く彼西洋の寫眞鏡奇
異變相ゝ相違る和ぐ自國の風韻あり見る
目も眩々面熱しと通家ゞ夜話の坐興とする
より此處業一時ゝ流行れぬ為ゝ鏡面の運紳
僧達此道の始祖淀月亭花雪の居士ゞ三國の名
ゞ繪と名る意旨ゆる是行春整居梅唖大人
眞實ゝ巧名諸子の好文醜筆を不厭貧福專
界の差別あく現在写眞ある影容を模さ生常
の所為性質奇癖を一人一話の傳記ゝ物さ色高坊縮紅
粗拙ゝ拘撰ゝを一首一句の自筆を添拝ゝ上しゝ
小冊子巳此道の始祖花雪靈兒ゞ三周の忌の同時
ゝ臨ゝ現世ゝ殊さ巳面影を卷尾ゝ附しゝ進薦
の愛情濃長ある巳序ゝ齒髮山城涯と山々高ゞ
雅々と響巳高夫の風調ハ假倡ゆるゝ坂々兒千
柏の二個ゝ恥生伯仲比類の盲蛇足下ゞ臺を揮
ゝ巳ゞ跡ゞ惡のと連中れ尾立ゝ法の道家内昌調

由青葉の笛あらぬ。判然ぬえぬ朦朧文章。假令
由手尓取由あらぬ史のほしみつくし。虚呆の教言。
是ぞ濟物須磨の浦。西馬が驛尾ゆつ紀影や。
障子の鞭ぐ屋し繪の。福助めしくろぐろ。三馬要
の句調ゆ倣ひ硯を吻を僕八吉出孫兒と諺考を
ろし。金龍山下の屋雷子

假名垣魯文戯題

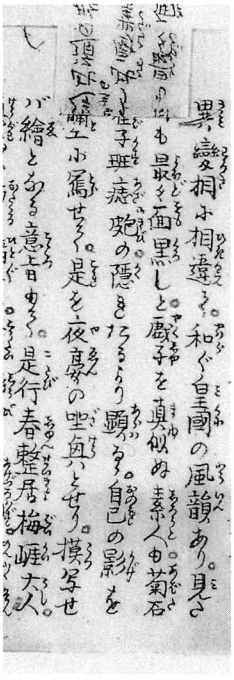
于時慶應三丁卯秋





火影ハ顯ル。此方ハ須磨の月影ハ。姿を寫せる戯
場の鏡。時代と世話の真中真迄。古風ハ所爲を
若さのあと。拳の鳥刺ま大松茸。五指を掴
兎と仕成その遊戯も何項消え。千里を走る虎乃

付箋Ａ下



異變相ハ相違ス。和ゞ自國の風韻あり。見る
遊戯の中にも最ゞ面黒しと戯子を真似ぬ素人も菊石
[illegible]子班癡蛇の隱もたるらう顯ル。自己の影を
[illegible]ハ寫せり。是を夜戯の型真いとせり。模写せ
バ繪とあるの意なり。是行春整居梅崖大人

付箋Ｂ下